

アジア・太平洋戦争における米軍の上海空襲

—上海住民の視点から考える—

劉 韻琿¹

要旨

本稿は、アジア・太平洋戦争期に日本軍の占領地となっていた上海に対して米軍が行った空襲について、住民の視点から考察を加えたものである。この時期の空爆・空襲に関する従来の研究では、日本軍による中国各地への空爆や、米軍による日本本土への空襲や原爆に関する研究が蓄積されてきた。しかし、米軍による中国の日本軍占領地への空襲については必ずしも多くの関心が行われてきたわけではない。そこで本稿では、米軍による上海空襲を取り上げ、空襲という「非日常」的な空間において上海住民が抱いた複雑な心理状況を分析した。その結果、空襲によって自らが被害を受けるかもしれないという死への恐怖と、日本軍による占領から脱することができるという解放への期待とが絡まり合う上海住民の複雑な心理を観察することができた。このような複雑な心情を読解することによって、「上海住民にとっての空襲体験とは何か」という問題を考えてみたい。なお、分析に当たっては、当時の上海に居住していた中国人、ユダヤ人の日記、自伝、回顧録などを使用した。

キーワード：米軍による空襲、占領地上海、上海住民の空襲体験、「下」からの視点

はじめに

1944年7月から1945年の終戦の直前までのおよそ一年間、在中米空軍は上海にある日本の軍事施設に対して空爆を加えた。その主な目的は、日本の艦隊航路を遮断することと、埠頭、飛行場、軍需倉庫、油庫、軍需工場といった軍事施設を弱体化させることであった。

第2次世界大戦中の空襲に関する研究には、中国と日本で一定の蓄積がある。中国では、1937年から1945年までの日本軍による空襲に研究が集中している。例えば、

前線である江蘇、浙江、江西、福建、広東といった地域における日中両軍の空中戦や、銃後の四川、貴州などの地域における日本軍の国民党「大後方」に対する空爆である。なかでも重慶爆撃²をめぐる研究は、最も蓄積が多い。これらの研究は、空襲の実態（規模と回数）、民衆の日常生活と心理、政府の対策、防空・消防事業の展開などのテーマを取り上げ、档案、新聞、日記などの史料を駆使し、ここ30年のあいだ豊かな研究成果を生み出してきた。他方日本では、東京、名古屋、大阪、神戸などの本土空襲に研究が集中し、とりわけ原爆に関する研究には膨大な蓄積がある³。

だが、終戦直前に米軍によって行われた日本占領地に対する空襲については、ほとんど研究がなされていない。その理由として考えられるのは、史料上の制約である。長志珠絵が指摘したように、空爆をめぐる記録は機密情報として軍や政府によって占有され、戦闘終了直後のみならず、戦後の長きにわたって公開が制限されてきた⁴。また、占領地における言論統制により、新聞は宣伝の道具となってきた。その報道内容から日本側の意図を読み取ることも重要ではあるが、歴史的事態を把握するという意味での史料的価値は低い。このような状況のなか、当時の上海に住んでいた一般人の日記や回顧録に記された上海空襲の記録は、その歴史を考証する際に重要な史料となる。

本稿では、米軍の上海空襲を地上の、すなわち住民の視点から考察する。その際、当時の上海に在住していた青年・顔濱の日記、記者陶菊隠の回顧録、上海ゲットーに住んでいたユダヤ難民の回顧録を主に使用する⁵。そのうち特に虹口区の上海ゲットーに住んでいたユダヤ難民の自伝が近年続々と出版されており、上海空襲をめぐる外国人の証言が確認された。本稿では、これらの二次史料を活用し、新聞・雑誌の空襲報道と照らし合わせつつ、「下からの視点」から空襲を描くことで、上海住民にとっての空襲とは何か、彼らは空襲をいかに受け止めたか、そしてその意味は何かについて考える。

I. 米軍による占領地上海への空襲

1. 上海空襲の背景と経過

実際に空襲が始まる前の 1943 年秋頃か

ら、すでに空襲に関するデマは上海で流れ始めていた。上海の銀行、工場、学校は時にある「お知らせ」を受け取るようになり、「間もなく中米空軍は上海に対して爆撃を行うので、市民は早めに帰郷してほしい⁶」との内容であった。この「お知らせ」は全市を驚かせた。日本軍はデマ厳禁という通告を出し、さらにデマを流した市民を逮捕した⁷。

当時上海に住んでいた記者陶菊隠の回想によると、米軍の戦闘機は早くも 1944 年 6 月 12 日から上海上空に飛来しはじめた。その日、防空警報が何度も鳴り響き、上海住民は大騒ぎであったが、翌日の新聞では空襲に関する報道は一切なかった。また、少し前に米軍による北平空襲が上海で話題になり、様々なデマが飛び交っていた中で、上海住民はこれらの異変を上海空襲の前哨戦ではないかと推測した。それから約一ヶ月後の 7 月 8 日、米軍機は上海に対する最初の空襲を行なった。陶菊隠は当日の状況を以下のように記している。

日本軍の展望台がまだ警報を鳴らしていない時、市民は大きな音を聞いた。窓も家屋も揺れていた。それは米軍機による上海に対しての爆撃だった。日本側の警報は大変遅れ、米軍機が 3 発目の砲弾を投下してから鳴りはじめたのだ。

これらの米軍機は成都付近の飛行場から飛んできた。当時の中国空軍は爆撃機を迎撃する航空力が弱く、ソ連の支援で 1939 年までなんとか持ちこたえていたが、ソ連の戦略的な方向転換に伴い、ソ連の中国支援空軍は 1939 年に中国から撤退した。これに

より中国空軍は自力で日本軍と対峙することになり、空中戦での敗北が相次いだ。1941年8月から、米空軍は援華・抗日の任務を継続した。クレア・L・シェンノートが率いた空軍志願隊、駐中特攻隊、米空軍第十四航空隊など、アメリカの駐中空軍は華南と華中で頻繁に日本空軍と対峙し、少なからぬ打撃を与えた。1944年後半から米軍は中国の成都を拠点とし、日本本土への大規模な爆撃を決定した。

中国内陸の蒋介石軍支配下にあった四川省の成都に、米軍基地が建設されることになった。そのため中国の農民7万5千人余りが動員され、人海戦術で飛行場が建設された⁸。この時期の対日長距離爆撃には、主に東・東北・東南という三つの戦略の方向性があった。東方面では日本本土の各種の軍需企業や軍事施設を攻撃するとともに重要な都市を選択的に爆撃し、東北方面では中国の東北部にある日本の軍需企業を破壊して日本軍の軍事物資の生産と供給能力を弱体化させ、東南方面では中国本土と台湾にある日本軍の飛行場に対して爆撃を行い日本機の作戦能力を破壊することにより、日本本土から東南アジアまでの海路と空路の交通を遮断することである⁹。

日本本土以外、占領地での空襲も行われていた。1944年7月から終戦直前まで、上海は空襲の副次的な目標となっていた。『上海地方志』によると、米軍は少なくとも12回上海の軍事目標を爆撃し、そのうち江湾飛行場を含む5つの飛行場に対して数回にわたって爆撃をおこなった¹⁰とされているが、実際のところ『申報』に報道された空襲の数はそれを上回っており、少なくとも20回以上行われたと考えられる。これらの

空襲の主な目的は、日本の埠頭、飛行場、軍需倉庫、油庫、軍需工場といった軍事施設を弱体化させることである¹¹。このような上海空襲は、「日本空爆」の陰にある、未だ語られていないもう一つの経験なのである。

2. 住民生活への影響

空襲下の上海では、一部の工場、会社、政府機関は操業を停止し、学校も休講になった。その中で上海住民の日常生活に最も直接的な影響を与えたのは、電気と水道の使用であった。毎晩灯火管制が実施されたほか、昼間の電気使用も空襲が始まる以前よりも厳しく制限されるようになった。空襲が行われるたび、上海の電気供給は数時間止まった。その中で最も深刻なのは、1944年11月21日の空襲によって引き起こされたフランス租界における大規模停電であった。この空襲で米軍は、上海の大手電力会社である上海電力会社を爆撃し、これにより上海の電力供給は大きな打撃を受けた。同会社以外の電力会社は規模が小さく、住民の電気需要に十分に対応できなかった。その結果、上海住民は照明も電話も利用できなくなった。翌22日、電話は通じるようになったが、電車はなお平常運転ができない状態であった。代わりに臨時汽車が走ったが、運行時間は数時間しかなく、プラットフォームは大混雑し乗車は非常に困難であった¹²。26日に南市に住む姉の家を訪れようとした上海青年の顔濱は、電車の利用を断念し、高額であった人力車の利用も諦め、大雨の中を徒歩で行くしかなかったという¹³。

また、水道水の使用量も大きく制限され

ることになった。1944年8月、上海水道水会社が水道水の供給量を半分に減らし、供給時間も午前9時から午後4時までに変更した¹⁴。そのため、住民は洗濯にも困ってしまった。彼らは空襲後の用水に対応できるようにするため、いつも浴槽に水をたっぷり溜めていた¹⁵。顔濱も日記で、隣人が水の使用量をめぐって喧嘩していたと記している¹⁶。

空襲という例外的な状況が次第に常態化し、上海市政府による一連の防空・防火政策が強化されていった。1944年8月30日、上海警察署は長寧路支局など16の支局内で防空壕を掘ることを決定した。9月11日、上海宣伝部は中央書報発行所が発行した『防空図鑑』を利用して住民に防空知識の普及活動を始めた。全40枚の防空図面には米国、ソ連、英国、ドイツ製の爆撃機のカラー図が印刷され、横に各機の戦闘力に関する説明文が添えられた。10月29日、上海市民防空本部は防火のために市内で井戸を掘り始めた¹⁷。また、夜にランプ、蝋燭が代わりに使われることになり、火災の危険が増したため、日本軍はさらに市民に水桶、簾、砂や土などを用意するよう求めるなど、空襲時の火災を予防するための緊急措置を講じた¹⁸。顔濱が所属していた盧湾区の保甲会議でも、負傷者に対する救急処置に関する講座が設けられた。彼は好奇心を持ってこれらの講座に参加した。そして実際には負傷していない健康状態の人々が包帯などで怪我の装いをする様子を見て、「奇妙」で「とても面白い」と思った¹⁹。

上海市政府の緊張感とは程遠い顔濱の態度は、ほとんどの上海住民の心理を代表するものであった。彼らは米軍の攻撃目標が

郊外の飛行場か、または黄浦江であるに違いないと信じていたため、米軍の砲弾が市街地に落ちることを心配する者はほとんどいなかった。

II. 上海住民の空襲体験

1. 歓迎

日常生活に不便を感じたにもかかわらず、ほとんどの上海住民は空襲に対して歓迎の姿勢を示した。1944年8月8日の朝、当時自宅にいた上海の青年顔濱は初めて空襲体験を記した。彼は次のように記している。

忠海²⁰が駆けつけてきて、「今朝4時50分、重慶からの美軍機B24型1機が上海に侵入し黄浦江に爆弾を投下した。今北京路のあちこちに『号外』が貼られている」と報告した。不思議なことに、こんな大事件がすぐ近くで発生したのに、私たちはまるで太鼓の中に閉じこもっていたようだ。忠海は報告を終え、非常に興奮していた。確かに、少数の成金や特殊な観念を持つ者を除いて、多くの市民は彼のように興奮しているだろう。暗くて狭い籠の中に閉じ込められた人々は、外の世界の輝きも美しさも眼に入らず、ほとんど眠りに落ちてしまいそうだ。しかし突然、外から凄まじい音がして、籠が揺れ始めた。それが一筋の光明をもたらし、眠りにつく人々の目を覚ました。希望が一人一人の心に満ちている²¹。

「籠が揺れ始めた」。わずか1機に過ぎないが、米軍によるこの空襲は顔濱にとって重大な意味を持っていた。上記の「少数の成金や特殊な観念を持つ者」とは、国難に

乗じてもうける資本家と日本側に協力の姿勢を示した「漢奸」を指すと思われる。彼らは決して空襲を望まず、現状が変わって欲しくもないが、一般人の心を満たした希望とは、空襲がもたらす抵抗と解放である。

また、1944年8月30日の空襲後、顔濱は以下のように記している。

昨夜11時ごろ突然警報が鳴り、さらに「バン」とか「どん」とか高射砲の轟音が響き、1時半ごろになってやっと落ち着いた。ほぼ全員がそれをはっきりと聞いていた。〔中略〕このような爆撃は全然怖くない。むしろ興奮している²²。

彼の「恐怖より興奮している」というような心理は当時上海の人々に共通していた。それは陶菊隠が記した「人々が避難するどころか、わざわざ米軍機を見に行く」という反応から窺うこともできる。以下一部引用する。

人々はベランダで、あるいは屋根に上がって飛行機を見た。さらに道の真ん中まで行って、頭を上げて飛行機を数える者もいた。〔中略〕上海人は「日本空軍の神風隊は無敵だと聞いたが、彼らの飛行機は今どこにあるの？ 神風兵員は今どこにいるの？」と互いに尋ね、喜んでいた²³。

特に人々を興奮させたのは、1944年11月11日に行われたそれまでで最大規模の空襲であった。陶菊隠によると、その日の午前8時45分頃、約20機が上海上空に進入し、それぞれ上海の北、南、東の3方向へ進攻し、3～5分の間隔で数回爆弾を投下し

た。攻撃目標は、上海の北部にある江湾空港、南部にある龍華空港及び高昌廟の軍用倉庫、東部の黄浦江に停泊した日本軍艦である。空襲の規模について陶菊隠は「爆弾が投下されるたびに、地震が発生したように家屋が激しく揺れ、ガラスがすべて割れてしまい、置物などが全部ひっくり返った²⁴」と記した。この空襲では、虹口飛行場から日本軍機2機が迎撃したが、一機は米軍機に撃墜され、もう一機は逃走した。これは日本軍機の最初で唯一の迎撃であった。

この空襲で上海の人々を大いに魅了したのは、1944年半ばから登場した当時最大級の大型爆撃機B-29である。B-29は「スーパー・フォートレス（超要塞）」と呼ばれたように、当時としては最大級の、しかも最高機能を備えた爆撃機であった。翼長が43メートル、全長30メートル、高さ9メートル、最高速度は時速576キロ、航続距離5230キロメートル、上昇限度12000メートル、搭載可能爆弾量は約10トン、その上機体の前後合わせて十数門の機関砲を備えていた。B-29は第二次世界大戦参戦国の空軍の中で最大の戦略爆撃機であり、日本軍機より明らかに大きく、上海の一般市民も一目でB-29の姿を確認できるほどであった。前述の青年顔濱も、彼が体験した空襲の中でB-29が最も印象的だったようである。彼は1944年11月11日の空襲で初めてB-29を見ることができ、日記の中で「威力が強い、自由自在に飛び回る」といった想像力あふれる描写でB-29への憧れを示した。彼は以下のように述べている。

9時頃、日記を書こうとすると、警報が鳴

った。続いて飛行機の音が大きく鳴り、高射砲の音も聞こえてきた。私は筆を置き、外に出た。やはり飛行機は三々五々、空高く飛んでいた。人々の顔にはみな笑顔が浮かび、恐怖は全くない。私も元気になった。米軍機の威力をようやく見る事ができた。B29は体積が膨大で、自由自在に飛び回っている。日本の軍機や高射砲は一切眼中にない。日本はかつて新聞でその防空能力を盛んに宣伝していたが、今日これを見て、取るに足らないことがわかった。この空襲は午後1時まで続き、範囲は広く、時間は長く、未曾有の規模だった。覚醒剤を飲んでいるようだ²⁵。

このようにB29の姿を目撃した上海住民はそれと日本軍機の雲泥の差を実感し、日本側の航空戦力と防空体制の脆弱さをさら確信できた。空襲が行われるたびに、ほとんどの上海住民は互いに談笑し、頭を上げて空中を自由に飛び回っているB29の銀翼を眺めながら、歓呼の声を上げ、空襲を「解放」の兆しとみなしていた。特に1945年に入り、太平洋諸島で日本軍敗北の消息が上海で広く伝えられており、人々は「もうすぐ夜が明ける」という感覚を共有し、日本軍の支配がそろそろ終わるだろうと予測していた。また上海での米軍の空襲はますます激しくなり、1944年に比べ規模と回数はそれを大いに上回り、戦争を1日も早く終わらせる勢いを示した。例えば1945年6月末の空襲では、17日午後数機のB-24、B-25が上海東北部を爆撃し、18日昼間には数機のP-28、P-57が上海周辺の飛行場を爆撃し、さらに22日昼間にはB-24、B-25、P-57などが上海周辺の飛行場および黄浦江沿岸の軍事施設を連続爆撃した²⁶。このよ

うなきわめて密度の高い空襲は、上海住民に希望を与えた。上海ゲッターに住んでいたユダヤ人Lilianeは「米軍がフィリピンに上陸し、ドイツ軍の敗北が相次いだ。市民は未来に希望を持っている。間違いなく、日本軍の支配は終わりに近づいている」と書いた²⁷。顔濱も日記に北平の解放、日露の交戦、ドイツ降伏など様々な真偽不明の流言、およびそれにとまって急騰した金価格とドル為替レートの異変などを記しながら、それらを日本軍による支配の終わりを告げる兆候とみなしていた。言論統制の厳しい占領下上海では報道されない日本軍の「敗色」を、人々は頻繁になってきた米軍の空襲から読み取った。

一方、1944年11月11日の空襲による一般人の死傷者は百人を超えており、「上海楽観論」を否定する結果をもたらし、それで不安に思った一部の人も存在した。ユダヤ人Lilianeは空襲を歓迎していた一方、「私たちの住宅地も爆撃を受けるかと、心配もしていた」と当時の複雑な心情を吐露した²⁸。

2. 恐怖

Lilianeの不安は現実になった。1945年7月17日の空襲で、虹口区にあるユダヤ人が居住していた上海ゲッターが爆撃を受け、ユダヤ人を含む千人以上の死傷者が出た。この空襲は彼らを極度の恐怖に陥れ、上海全市に強い衝撃を与えた。虹口は各国の共同租界でありながら、日本人が特に多く(約10万人)住んでいた地区であり、「日本人街」あるいは「日本租界」とまで呼ばれていた。さらに虹口公園正門前に日本海軍特別陸戦車隊本部があったため、この地域が

米軍空襲の標的になったのも、決して意外なことではない。米軍空襲に対応するため、日本軍は呉淞、浦東、虹口にあった軍用物資を密かに繁華街に移した。虹口在住の日本人居留民（主に女性と子供）も分散させられた。旧租界にある立派な大邸宅は接收され、かつてにぎやかだった虹口地区は寂しいところになった。日本の商店のほとんどは休業してしまい、その商品も残りは幾らもなくなった²⁹。

日本人居留民以外、約 1400 人のユダヤ人が虹口にあった上海ゲットーに居住していた。当時ナチス支配下にあったヨーロッパ地域から多数のユダヤ人が上海へ逃れてきており、彼らは 1943 年 2 月 18 日に日本軍が発した布告により、同地域に居住および活動を制限され、終戦までここに留まっていた³⁰。当時日本人は、上海ゲットーが彼らにとってメリットのある存在だと考えており、米軍がゲットーに対して何らはばかりとところがあるだろうと予想していたため、ゲットーに兵器を積み、油を貯蔵し、無線局を設置し、軍を駐屯させ、特にゲットーで太平洋上の日本軍艦を指揮する海軍指揮所を密かに設置している³¹。虹口空襲では、上海ゲットーがその標的となった。

7 月 17 日未明、沖縄から 25 機の A-26 が出動し、正午に上海上空に到着した。これらの爆撃機は地上の設備では検出できない高度で飛行していたため、上海の日本軍が把握していた唯一の情報は、沖縄から爆撃機がどんどん近づいているということだけであった。12 時 13 分頃、これらの爆撃機が虹口に設置された日本軍の無線局を襲撃した。虹口の石油タンクを狙っていたはずの爆弾が、ゲットーのすぐ離れた場所に落

下した。その日、虹口ゲットーに爆弾 263 発が落ちた。事後統計によると、華人死亡 360 名、負傷 703 名、外国人死傷 31 名、日本人死傷 2 名であった。この空襲により多くの負傷者が生まれ、約 700 人の難民が住む所を失った³²。虹口の被爆地域を訪れた『申報』記者は、空襲後の惨状を次のように記録した。

路上の血まみれになった死体のほかに、真っ赤になった血の跡が人々に踏みにじられ、瓦礫や木の下で生き埋めになった人がどれほどいるだろうか。記者は空襲発生から 4 時間後に一人がレンガの山から引きずり出されたのを目撃した。負傷の程度はそれほど深刻ではなかったのだから、もう少し早く発見できれば、死ぬほどではなかったかもしれない。中国人やユダヤ人が駆け回って救助活動を行っている。負傷者はトラックや人力車に運ばれ、あちこちに救急搬送された³³。

空襲後、平素はほとんど行き来しない中国人とユダヤ人が共に救助に参加した。彼らは遺体を掘り出し、負傷者を病院に搬送した。空襲の翌日には大雨が降った。爆撃を受けたボロボロの屋根や壁に雨が入り部屋が水浸しになったため、数百人の生存者も住む場所を失った。この空襲を経験した当時まだ幼かったユダヤ人たちは 50 年後の再会であの日を語った。以下一部引用する。

Rena Krasno :

あれははじめじめした日だった。空はどんよりと曇っていた。7 回目の警報が鳴ったら、爆弾が落ち始めた。友人は自転車で家へ逃げ

る時、ある武装した日本軍兵士に自転車を奪われた。その人はその自転車で乗ってさっさと逃げてしまった³⁴。

Ruth Spiegler :

爆撃が発生した時、私たちは嘉道理学校にいたが、爆撃機の音が聞こえたら急いで机の下に隠れた。あの時私は10歳だったが、まるで昨日の出来事のようにあの日の光景を覚えている。父は空襲後、急いで学校に迎えに来てくれた。父は私の目を手で覆い、「目を閉じてくれ」と言いながら、道端にある死体と悲鳴をあげる負傷者を私に見せないようにした³⁵。

Doris Fogel :

7月17日が来るたびに、あの恐ろしい爆撃を思い出してしまう。Ruth Spieglerと同じように、私もその日嘉道理学校にいて、空襲の時に机や椅子の下に隠れていた。数年後、私は中学校の教師になった。歴史を教える際に、私はいつも1945年7月17日の爆撃の歴史を学生に教える。あの爆撃が私に与えた影響はあまりにも大きすぎるからだ³⁶。

Lea Baumann :

あの日、私たち家族四人は一緒に死ぬのではないかと思った。私はもともと嘉道理学校で昼食会に参加するはずだったが、用事があったので早めに家に帰った。父と兄も職場にいるはずだったのに、なぜか家に帰っていた。それで家族全員でお昼を食べることになった。食事の最中に突然爆弾が落ちて、私たち四人は慌て、しっかりと抱き合った。その瞬間、家族がとても親しく感じられ、どうせ死ぬのならみんなで一緒に死のうと思った³⁷。

虹口空襲はユダヤ人の死傷者を多く出し、上海の人々を震え立たせた。実際、ユダヤ人以外に、中国人の死傷者も出た。戦後、上海広慈医院のある医者、この時の被害について次のように整理している。

1945年7月に上海で行われた最後の二度の爆撃の後、広慈医院は七十人の負傷者を収容治療した。そのうち男性は49人、女性は31人。年齢は15歳～71歳。18人は浦東、20人は上海近郊、32人は旧租界に居住していた。負傷者の約半分は屋外作業に従事していた農民であった³⁸。

この惨事が発生する前まで、ゲッターに住んでいたユダヤ難民は空襲に対して、上海市民と似たような歓迎の態度を示していた。ユダヤ人Lilianは空襲の初期、「みんなは米軍の飛行士に歓呼の声を上げたくて、爆弾と高射砲の音を聞きたがった。防空壕に入る前、私はいつも高射砲の煙を見ながら、空中の爆撃機に腕を振っていた³⁹」と上海市民と同じように心を踊らせていたことを記した。多くのユダヤ人難民は防空訓練に真面目に参加せず、米国が彼らの居住区を爆撃することなどないと信じていた。空襲が起きたとき、多くの難民、特にその中の若者たちは、空襲の様子を興味深く見て、米軍機の戦闘能力を誇りに思っていた⁴⁰が、虹口空襲で彼らの認識は覆された。

この空襲により千人以上の死傷者が出たため、フランス租界にいた顔濱も恐怖を覚え、「これからはより警戒しなければならない」と思った。しかしその恐怖は、実際に爆撃を受けたユダヤ人の抱いた恐怖と比べ

ると当然距離感のあるものだった。一方、ユダヤ人ほどその恐ろしさを体験しなかった一人として、顔濱はまだその暴力の本質に触れてはいなかった。

このように、上海の人々は空襲の爆撃に対して歓迎の姿勢を示した一方、不安な気持ちをも抱いていた。彼らは米軍が日本軍の軍事施設のみを標的とするだろうと確信していたが、一般人の死傷者が増えるにつれて自らの運命を不安視するようになり、この先どのような運命が到来するかも分からないまま、危険の中で日常生活を維持しつつ生き延びるしかなかった。特に空爆の直接的な被害を被った一部のユダヤ人たちは、上海市民よりも空襲の恐ろしさを知り、米軍に対して複雑な気持ちを抱えていた。

Ⅲ. 「盲爆」説をめぐる

1. 『申報』は上海空襲をどう報じたか

上海住民の空襲体験を考察した上で、それを当時の上海の新聞による空襲報道と照らしあわせながら、両者のズレに注目したい。ここでは、当時の上海で最も影響力のあった新聞『申報』を取り上げる。この時の『申報』は日本軍報道部の支配下にあったので、その空襲報道はほとんどが上海日本陸軍報道部の公表を参考にしていた。1944年の空襲に関する『申報』の報道のほとんどが日本の戦闘機・高射砲による迎撃と米軍機の逃走が中心的な内容で、被害については「軽微」あるいは「なし」とされることが多かった。例えば8月8日の記事では、「敵機が日本軍の勇敢な出撃によって大損害を受けた。今回の襲撃は、上海における神経戦にほかならない⁴¹⁾」と書かれた。

また、1944年8月30日の空襲については、「29日午後11時頃、敵機数機が上海地区に侵入したが、直ちに我が方に撃退された⁴²⁾」と報じた。

上海ゲッターに住んでいたユダヤ難民のRena Krasnoも千篇一律の空襲報道に気づいていた。彼女は次のように述べている。

新聞には「日本軍に迎撃され、慌てふためいて逃走した」とか、「敵機襲来、日本軍機に発覚され、慌てて退却した」とか、似たような報道ばかりだ⁴³⁾。

一方、一般人の死傷者の発生にともなうて、新聞では「盲爆（無差別爆撃）」という言葉が頻繁に登場するようになった。『申報』の見出しには、「敵機盲爆我国民衆」（1945年6月4日付）、「敵美盲爆暴行」（1945年6月20日付）、「敵機盲爆上海市街」（1945年7月23日付）のような「盲爆」という言葉を使用したものが多く見られる。また、上海だけでなく、漢口、奉天、台湾、サイゴン⁴⁴⁾などの日本占領地への米軍空襲報道においても「盲爆」という言葉が使われており、これらの空襲が無差別爆撃として性格づけられた。

『申報』は「盲爆」を喧伝することで上海の民心を鎮静化し、灯火管制、人口疎開に対する民衆の積極的に協力を引き出そうとした。前述のように、空襲の際に上海住民は、普段通り外出し、外出先に滞在するなど、全く緊張感のない行動をとる者が多かった。この状況に対して日本軍警察局は1944年8月21日、「空襲の際には協力もせず、明らかに米英に惑わされていた」と上海住民を非難し、「日中両国の人民が共に生

きるか死ぬかの運命にある。日本人が死んでしまえば、中国人は独力で生き残ることができるのか⁴⁵」と怒りを露わにした。上海日本軍報道部の松平報道部長も、これまで空襲警報下の住民の行動が「未だ当局の指示に服従していない。とても残念だ⁴⁶」とし、上海人の空襲への無関心を批判した。以下一部引用する。

泰興路、康定路で高射砲砲弾の破片により死者2人、重傷者2人、軽傷者13人が出た。すべて防空意識の低い中国人であった。〔中略〕上海市民はなおも上海では戦争の影響を受けないという考え方を持っている。これは完全に間違っている。今後、市民の防空意識の向上を図ってほしい⁴⁷。

また、1944年11月28日の空襲について、『申報』はその被爆地が「あるフランス神父の提案によって難民地域と定められたため、日中両軍はそこで軍事的行為を行ったことはなかったのだが、この日初めて米軍による空襲の標的となった」とし、この時の状況について次のように報じている。

米軍は焼夷弾を投下し、数百人の死傷者を出し、七、八十軒の民家が破壊された。この地区には軍事施設が全くない。米軍機は数千メートルの上空にあっても明察できるはずなのに、罪のない平民を無残に殺戮した。全市五百万の市民は、米軍の蛮行に憤激し、歯ざしりをしている⁴⁸。

このような「無差別爆撃」を中心とする報道は、日本軍報道部の意を受けて書き上げたものである。その意向は、日本軍海軍

報道部松平報道部長が上海市宣伝処長劉徳焯に伝達した「宣伝要領」から窺うことができる。「冷静に対応すること、デマや流言を厳しく取り締まること、政府、軍部、大使館の政策を擁護すること」といった内容のほか、空襲報道について以下のように具体的な指示がなされている。

〔前略〕

4) 中国各地における不安定な状況を上海各紙に伝え、英・米・ソの利害関係、対立およびそれぞれの野心を暴露するよう宣伝を広げる。

5) 米国の勢力は実は重慶に侵入し、重慶を圧迫している。民族独立のために奮闘しているフィリピンとミャンマーの国民を応援するよう報道する。

6) 人口疎開政策を有効に実施するため、米軍機の非人道的な盲爆を非難する。市民の防空意識を高める⁴⁹。

このように、米軍の「非人道的」で「残忍」なイメージが「米国と『大東亜』の対立」を軸とした宣伝パターンによって作り出された。1944年12月20日の『申報』はその前夜の空襲について、「敵の米飛行士は自身の安全のため、卑しい手段を使って1万メートル以上の高度から盲目的に爆弾を投下した。南市の一般住宅地が残酷に爆撃された⁵⁰」と報道した。また、被爆地の惨状を示す写真が掲載され、被爆地住民が米軍に対して抗議の声も多く報道された⁵¹。さらに、米軍の人種差別を宣伝することを通して、彼らの「悪」のイメージを強化した。例えば、1945年2月6日の『申報』記事は「イギリス人、アメリカ人は元〔の時代〕

から中国人を蔑視している。彼らは彼らと同等以上の戦闘力を持つ日本に対してもなお露骨な軽蔑を行っているのに、我々中国人に対していい印象を持っているわけがないだろう。とにかく彼らは中国人を奴隷とみなしている⁵²と米英の傲慢さを描いた。それ以外に、同年3月20日の『申報』は「インディアン戦争の問題、黒人奴隷の問題、いずれもアメリカ人の性格が残虐であることの証である。彼らは昔から白人優位の思想を持って、有色人種を劣等民族とみなしている。彼らにとって白人以外の人種を殺すことは、ただ動物を殺すぐらいのものである⁵³」と米国歴史上の人種差別問題を根拠に、アメリカ人の性格には「生まれつきの残虐さ」があると主張した。

また、宣伝の重点は重慶の無能さにも置かれていた。重慶には「対日作戦米渝⁵⁴統一指揮部」があり、蒋介石が総司令官を務めているが、実権を握っているのは米軍参謀長のスティール・ウェルで、重慶軍の作戦はすべて彼の指揮下にあった。また、米第十四航空隊、米渝飛行連隊などの米空軍力はいずれも米国指揮官が直接管轄しており、重慶側には関与する権利がなかった。『申報』は「米空軍が重慶に対して援助を行うかどうか、どれだけの兵力を派遣するかは、すべて米国側が自由に決定する⁵⁵」と主張している。さらに、上海以外の日本占領地の「復興」が米軍の空襲によって破綻してしまったことを主張した。

米軍の「焦土戦術」は非人道的である。例えば、これまで米軍は降伏した中国軍、民衆、繁華街、名所旧跡などを爆撃して来た。これらの都市はもともと日本軍の占領下で復興の

気象が現れ始めていたが、現在はすべて米軍の空襲によって破壊されてしまった⁵⁶。

さらに、米軍の空襲が「盲爆」であると位置付けた上で、日本軍は自らの「在中作戦の真義」を繰り返し強調し、作戦の目的が「米英のアジア制覇の妄想を打破することにあると宣伝していた。この理屈は「大東亜戦争」の初期から提起されていたが、米軍の空襲をきっかけにより盛んに唱えられるようになった。その目的は英米のアジア侵略の野望を暴露することにあった。これらの記事では、重慶政府が米国の罠に陥ったとされている。日本側と重慶政府との敵対は「実に止むを得ない行動」であると弁明し、柔軟な言い回しを使っていた。例えば、1944年8月、日本軍が『申報』で「道義精神を徹底し、共同の敵を潰す」との声明を発表した。以下で一部引用する。

中国民衆は日本軍の友であり、重慶軍も日本軍の敵ではない。米国だけが日中両国の共同の敵である。〔中略〕重慶軍をこのような悲惨な境遇に陥れたのは、老獪な米国である。米国は他の民族と人種を犠牲にして戦争を起こそうとしている⁵⁷。

米軍の介入によって、日本側は上海住民に対して、真の敵味方関係、「大東亜戦争」の初心などを再び唱えるようになった一方、このような『申報』の空襲報道に対して、上海の住民は不信感を示した。例えば1944年8月30日の空襲報道を読んだ上海青年顔濱は、「今朝の新聞には、昨夜敵機が上海に侵攻したが、高射砲で撃退され、慌てて逃走したと載っていた。この耳を掩いて鈴を

盗むような報道で、どうして住民を欺くことができようか⁵⁸」と日記に記し、新聞に対する不信感を露わにしている。また彼は1944年11月21日の空襲の後、「某方⁵⁹はいつも新聞で空軍の強力さを豪語していたが、今日はその実力の差を見ることができて、まさに張り子の虎のようだ⁶⁰」と記し、新聞に報道された日本空軍の実力をさらに疑うようになった。

他方では、『申報』に報道された被害に対して異なる意見を持つ上海住民も少なくない。例えば1944年11月11日の空襲について、『申報』はこの空襲による中国人死傷者はおよそ300人に上り、そのうち死者は約3分の1を数え、「今回の被害者はすべて一般住民であり、米軍の空襲が無計画で無差別な爆撃」であると報道した。しかし上海在住の記者陶菊隠もこの空襲の被害について、「報道された数字は実際よりはるかに少ない。その空襲で死傷者は4,500人を超えていることは、誰でも知っている。被爆地は日本側に封鎖されたため、住宅の被害は不明であった⁶¹」と述べており、『申報』が被害を隠蔽したことを指摘した。顔濱も同じく日記で「この辺りは住宅地が多く、一般住民の死傷者を出したが、そこに元々軍衣工場があつて、後に造兵廠に改造された。それこそこの空襲の目標なのだ⁶²」と『申報』と異なる主張を述べており、被害を隠蔽する理由はこれらの死傷者はほとんど日本軍の高射砲で死んだと指摘し、以下のように述べている。

空襲で命を失った人もいた。何よりも、X方⁶³の高射砲砲弾が質が悪く、地面に落ちてから爆発するため、より多くの人が被害を受

けた⁶⁴。

このように、多くの上海住民は『申報』が作り出した米軍像・空襲像を疑うようになり、特に米軍機のB-29と日本軍機の雲泥の差を目撃した後、彼らは「米機が撃退された」といった報道を信用しなくなった。その結果、『申報』が唱えた「盲爆説」は上海住民に受け入れられなかった。

2. 精密爆撃の神話

そもそも米軍の上海空襲は、無差別爆撃だったのか。戦略爆撃に関する研究を行った前田哲男によると、第二次世界大戦期において米空軍は、標的となる地域の住民に恐怖を与えるということよりも、精密爆撃で敵の戦闘能力を破壊するという自らの空爆の思想を唱えたが、そもそも「精密爆撃」を行うということ自体、つまり上海の日本軍軍事施設のみに対して爆撃を行うこと自体がほとんど不可能なことである⁶⁵。また田中利幸は、当時のレーダーやノーデン爆撃照準器といった攻撃目標設定技術は、極めて不完全なものであった。その上、しばしば雨雲で視界が悪い、投下した爆弾が強風による影響を受ける、乱気流によって機体が激しく揺れて不安定になる、といったような気象条件による問題があったと指摘した⁶⁶。さらに、上海ゲッターに関する研究を行ったKranzler Davidは、「米軍の飛行士は非武装地帯を爆撃してはならないという命令を受けてはいたが、爆撃目標の隣接の非武装地帯は常に爆撃される危険にある⁶⁷」と似たような意見を述べた。つまり、低空飛行は高射砲に撃墜されるリスクが高いため、多くの飛行士は安全のために高度

から爆弾を投下した可能性も考えられる。そのため、上海の一般住民は常に空襲の危険に晒されていた。この潜在的危険性については、雑誌『交通週刊』に掲載された米軍将校の証言からも窺える。

チャールズ中將は記者団との会見を開き、中国の内陸で行われた対日爆撃について談話を発表した。彼は「中国の民衆、都市は甚大な被害を受けかねない。日本軍の軍事施設のみに対して正確な爆撃を行うことは極めて難しいため、多くの犠牲者が生まれる可能性がある」と述べた⁶⁸。

同誌はまた、B24、B25型爆撃機の作戦の方法からそれによる精密爆撃の限界を指摘し、その爆撃が実質無差別爆撃であると以下のように述べている。

B24、B25は来襲する際に、たびたび低空爆撃を行い、機銃掃射をした。この度の空襲は戦略爆撃であると思われていたが、実は市街地区に対しての無差別爆撃であり、遭難したのは無辜の住民たちばかりである。それは、中国民衆の憤激を引き起こしただけであった⁶⁹。

さらに、1945年7月に南京で創刊された『毎週訳報』には王永という作者は空襲被害の問題についてパリ爆撃の事例を想起し、以下のように述べている。

[空襲のせいで]上海人々は不安に襲われ、びくびくしているが、なぜこんなに多くの苦痛には耐えなければならないのか分からない。1940年6月、10万人がパリ爆撃で命を失った。

それに対してナチスは、これでフランスが解放を迎えると主張した。しかし1944年、再びパリの20万人が爆撃された。これらの殉難者は「フランス解放」の計画に入れられなかった⁷⁰。

ここでパリ爆撃の事例を挙げたのは、おそらく上海もそれと似て、「捨てる石」のような境遇にあることが王永に意識されていたのであろう。つまり、「解放」と名乗るの裏には、パリの一般市民がその犠牲になったという事実を指摘しているのである。勿論、上海の死傷者数は比較的少なく、パリの20万人まで及ぼした被害とは比べ物にはならないが、一部の人の命と引き換えに国家・民族の解放を収めるというパターンには、共通の思想が横たわっていると王永には感じられたのであろうと思われる。

これらの雑誌も日本軍報道部指導下の『申報』と同じくその政治的性格や信憑性については考証を待たなければならないが、米軍機の作戦方法の限界から考えても、常識的にも、空爆の「万に一つの失敗もない」というような「精密爆撃の神話」が否定されることになり、上海住民が常に死の危険と隣り合わせの状況に置かれていた事実是否定できないだろう。

3. 「盲爆」説の否認と解放の意味

これらの「盲爆」をめぐる様々な説には、空襲の際に上海の人々が避難すべきかどうかという単なる生存の問題が存在するだけでなく、上海の人々が自らのアイデンティティをどのように認識していたかという問題も存在する。つまり、上海人の空襲体験には、日本と同じ側に立って「被害者」に

なるか、それともその反対側に立って「被解放者」になるか、という占領状態のなかで生きる住民であるがゆえに避けては通れないポジショナリティの問題が内在しているのである。このようなポジショナリティの問題こそ占領地上海における空襲体験の特殊性の根源であろう。これまでの空襲研究によると、多くの場合、空襲は被害を受けた人々の団結を強める効果がある。例えば1938年の日本軍に行われた重慶爆撃の場合、もともと抗戦に対してほとんど無関心だった重慶の人々は、爆撃下で統一の闘志を奮い立たせられた⁷¹。それを経験した作家の朱自清は「論轟炸（爆撃を論じる）」という文章の中で次のように述べている。

爆撃は、中国人一人ひとりに共通の敵を認識させた。敵機はどこにでも来る、すべてを掃射する。天地の間には安全な死角なんてない。みんなは共に恐れ、共に憎む。抗戦はみんなの任務であり、すべての中国人の任務である。爆撃はすべての中国人をひとつにした⁷²。

前線と銃後の境界線を消した空襲によって、重慶民衆の間にある種の「被害の共同体」が形成された。朱自清は空襲に遭った時の「恐怖」と「憎悪」という2つの共通感覚があるからこそ集団主義が生まれると述べた。同じ重慶爆撃を経験したエドガー・スノーは、それを「日本が中国統一のために最も貢献したもの」とまで位置づけた。スノーも「共同の憎悪」について、次のように述べている。

彼ら〔重慶市民〕は、侵略者に対して特別

で深刻な憎悪を持っている。穴をくぐったり、地面に伏せて爆撃機を避けたり、母親が息子の死体を探すのを見たり、焼死した学童の匂いを嗅いだりしたことがなければ、その憎悪を決して知ることはできない⁷³。

すなわち、1938～1941年の間に200回以上も行われ、1万2000人の死傷者を出した日本軍の重慶空襲は、重慶市民の士気を打ち砕くどころか、かえって強化させてしまった。民衆に恐怖を与えることを目的とする爆撃であったが、階級、民族を超えた民衆の結束力や互助精神が生まれ、中国人の抗戦意欲はより強くなった。

それに比べると、上海人の複雑な空襲体験には、「恐怖」はあったとしても、必ずしも「憎悪」があるとは限らない。いったい上海の人々は誰を憎悪すればいいのだろうか。死傷者を大量に出した空襲では、「事実上の加害者＝米国」と「もともとの敵＝日本」が合致しないため、上海の人々は混乱してしまった。米軍の飛行士が爆弾を投下する際に当該地域における「非軍事目標」の有無を注意深く確認したかどうか、その是非については、上海の人々が知る由もなかった。しかし、彼らはこうした爆撃が「盲爆」ではないと信じていた。このような「盲爆説」に対する否認の裏には、「爆撃の対象になるはずがない」という素朴な自信以外に、「祖国の捨て石」になってしまうかもしれないという恐怖心があるように思われる。

そこでこの「解放のための空爆」という「虚構性」のなかに生きていた上海の人々にとっての「解放」の意味について改めて考えてみると、彼らの「解放感」を想うに、それは必ずしも被占領者が望む占領からの

解放に寄せられるものではないであろう。彼らの恐れつつも喜ぶという感覚は、暴力に晒されながらも「何かが変わるかもしれない」という希望を持つことを語っている。このような感覚は、やはり直接的な被害を受けた人々の喪失感とは異なる感覚であろう。直接の被害者は未来の希望が絶たれ、「被害者」というカテゴリーの内側に放り込まれてしまった。彼らは決して喜ぶことはできない。しかし、戦争に巻き込まれながらも悲惨な状況を乗り越えようとした人々にとって、その被害とまでは言えないしばしの穏やかな空間には、ある種の希望が生み出されたのである。空襲によって開かれた未来の一種の可能性が見えてきた。このような未決性は戦場での勝利を意味する「解放」というよりは、上海の人々にとっての希望であった。

おわりに

米軍による上海空襲下に置かれた人々は空襲という極めて恐ろしい出来事に対して、「恐怖」以外に、「喜び」という心理を示した。米軍の空襲は上海住民に「終戦の予感」を早めにもたらした。一方、解放の予感とともに死の危険が迫ってきたことは、上海の人々も徐々に意識し始めていた。上海の人々にとっての「解放」は、想像による勝利の喜びではなく、矛盾で残酷な現実である。未だ直接の被害を受けていない人々は幸運を望み、空襲がもたらすであろう「解放」を夢想していた。一方、空襲で家を失って家族を失った人々にとっては、「解放」という言葉の外観は剥がれ落ち、その中身である暴力の本質を目にすることとなった。

『申報』は「盲爆」をはじめとする無差別爆撃を意味する言葉、同時期の被爆地の写真と被害者の抗議、米軍の差別と暴行、重慶政府の無能と愚鈍などを通して、米軍の空襲を「無差別で非人道的」と位置付けた。しかし上海住民はただ受動的に報道を受け取っていたわけではなく、自ら能動的に空襲に対して解釈を行い、『申報』が唱えた「盲爆説」に不信感を示した。

信憑性の高い一次資料にアクセスしにくいため、上海空襲の性質、つまり「無差別爆撃」をめぐる真相究明の道はまだ遠い。その真相を究明するのは勿論重要ではあるが、当時の地上にいる上海の人々は何を考え、何を信じたかったのか、そしてそうする理由とは何だったのか、といった民衆の心理を分析することも重要である。本稿では米軍側の一次資料に接することができなかったため空襲の性質を明らかにすることができなかったが、上海民衆の証言を発掘して後者に対する考察を試み、上海住民にとっての米軍空襲像を描き出してみた。それで、空襲によって自らが被害を受けるかもしれないという死への恐怖と、日本軍による占領から脱することができるという解放への期待とが絡まり合う上海住民の複雑な心境が確認でき、「被害者の恐怖」を軸とした空襲叙述と異なる様相を呈した。

最後に、これはあくまでも歴史的想像ではないが、上海住民の「解放感」を日常生活のレベルに落とし込んで観察してみると、それは日本軍の支配の終結への期待と同時に、ある未決性を持つ未来の到来に対する期待として理解することもできるように思われる。「現在」のすべてを無化させる、原始的な災害に近い力を持つ空襲は、現在

の抑圧された（必ずしも日本軍の支配による抑圧ではない）生活を覆す可能性がある。

残念ながら、上海空襲について上海在住の中国人とユダヤ人の体験が確認できた一方、虹口に住んでいた日本人住民の空襲体験を本稿で描くことができなかった。戦後の引揚者の手記・回顧録から彼らの空襲に対する態度を少し窺うことができるが、その資料収集の作業はまだ途中である。勝手な推測ではあるが、同じ米軍による空襲でありながら、日本本土にいる日本人と比べると、上海の日本人住民の心理はより複雑であろう。この「上海住民」という受け手の視点をさらに豊かにすることを今後の課題としたい。

脚注*

- 1 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程。
- 2 1990年代に至るまで、重慶大爆撃をめぐる研究は中国学界で関心を引き起こしていなかった。この分野の研究は日本の研究者の前田哲男が最初に行っており（前田哲男『戦略爆撃の思想：ゲルニカ・重慶・広島』朝日新聞社、1988年）、中国の研究者に大いに参考された。近年の研究は、古琳暉「近二十年来關於抗戰時期日本空襲与中国反空襲闘争研究総述」『抗日戦争研究』2012年第2号。潘洵ら『抗日戦争時期重慶大轟炸研究』商務印書館、2013年。潘洵「視野・理念・史料：關於深化重慶大轟炸研究的思考」『西南大学学报（社会科学版）』2014年第4号。潘洵「深化侵華日軍無差別轟炸研究的方法論思考」『抗日戦争研究』2016年第2号、などが代表的である。
- 3 例えば、前田哲男、前掲書、田中利幸『空の戦争史』講談社、2008年。荒井信一『空爆の歴史』岩波新書、2008年。長志珠絵『占領期・占領空間と戦争の記憶』有志舎、2013年。
- 4 長志珠絵、同前、168頁。
- 5 顔濱著、采金整理：『1942-1945：我的上海

- 淪陷生活』人民出版社、2015年（以下では、編者につけられたこの書名を使わず、「顔濱日記」とする）。陶菊隱『孤島見聞』上海人民出版社、1979年。Liliane Willens 著、劉握宇訳『1927-1952 一个犹太人的上海記憶』生活・読書・新知三聯書店、2018年。
- 6 「美機轟炸前的上海」『聯合週報』第28期、1944年。
 - 7 「美機轟炸前的上海」『聯合週報』第28期、1944年。
 - 8 田中利幸、前掲書、213頁。
 - 9 『飛虎隊与美国援華空軍』編委會『飛虎隊与美国援華空軍 1937-1945』重慶出版社、2015年、245頁。
 - 10 同前。
 - 11 Kranzler David 著、許步曾訳『上海犹太難民社区 1938-1945』三聯書店上海分店、1991年、358頁。
 - 12 陶菊隱、前掲書、291頁。
 - 13 顔濱日記 1944年11月28日付。
 - 14 吳景平『抗戰時期的上海經濟』188頁。
 - 15 Liliane Willens 著、劉握宇訳『1927-1952 一个犹太人的上海記憶』生活・読書・新知三聯書店、2018年、191頁。
 - 16 顔濱日記 1944年8月30日付。
 - 17 宋元鵬編、前掲書。
 - 18 王寿林編『上海消防百年紀事』上海科学技术出版社、1994年、117頁。
 - 19 顔濱日記 1944年10月11日。
 - 20 顔濱の友人。
 - 21 顔濱日記 1944年8月8日付。
 - 22 顔濱日記 1944年8月30日付。
 - 23 陶菊隱、前掲書、288頁。
 - 24 陶菊隱、前掲書、289頁。
 - 25 顔濱日記 1944年11月11日付。
 - 26 宋元鵬編、前掲書。
 - 27 Liliane Willens、前掲書、195頁。
 - 28 Liliane Willens、前掲書、191頁。
 - 29 「美機轟炸前的上海」『聯合週報』第28期、1944年。
 - 30 阿部吉雄「上海のユダヤ人ゲットーに関する考察」『言語文化論究』2002年第15号。
 - 31 Rena Krasno、前掲書、118頁。
 - 32 『申報』1945年7月19日。
 - 33 『申報』1945年7月18日。
 - 34 Rena Krasno、前掲書、118頁。
 - 35 李惟璋『犹太難民与上海 第1輯』上海交通大学出版社、2015年、211頁。
 - 36 同前、211頁。

- 37 同前, 211 頁.
- 38 沈錫元, Bordes 「關於 1945 年 7 月上海被轟炸時在上海廣慈醫院所收之受傷者的一些報告」『震旦医刊』1945 年, 第 10 卷, 第 5~6 期.
- 39 Liliane Willens, 前掲書, 191 頁.
- 40 Kranzler David, 前掲書, 358 頁.
- 41 『申報』1944 年 8 月 8 日.
- 42 『申報』1944 年 8 月 30 日.
- 43 Rena Krasno 著, 雷格訳 『上海往事 1923-1949: 犹太少女的中国歲月』五洲伝播出版社, 117 頁.
- 44 『申報』1944 年 10 月 20 日付, 1944 年 12 月 13 日付, 1945 年 02 月 11 日付, 1945 年 02 月 28 日付を参照.
- 45 陶菊隱, 前掲書.
- 46 『申報』1944 年 11 月 12 日.
- 47 『申報』1944 年 11 月 12 日.
- 48 『申報』1944 年 11 月 30 日.
- 49 上海市档案馆編 『日本侵略上海史料匯編(中)』上海人民出版社, 2015 年, 728 頁.
- 50 『申報』1944 年 12 月 20 日.
- 51 『申報』1944 年 7 月 16 日.
- 52 『申報』1945 年 2 月 6 日.
- 53 『申報』1945 年 3 月 20 日.
- 54 アメリカと重慶. 以下同.
- 55 『申報』1944 年 8 月 18 日.
- 56 『申報』1944 年 8 月 18 日.
- 57 『申報』1944 年 8 月 18 日.
- 58 顏濱日記 1944 年 8 月 30 日付.
- 59 日本側を指す. 顏濱は反日の嫌疑を避けるため, 日記で日本側を「某方」「X 方」といった別称を使っていた. 以下同.
- 60 顏濱日記 1944 年 11 月 21 日付.
- 61 陶菊隱, 前掲書, 291 頁.
- 62 顏濱日記 1944 年 11 月 11 日付.
- 63 日本側を指す. 顏濱は反日の嫌疑を避けるため, 日記で日本側を「某方」「X 方」といった別称を使っていた. 以下同.
- 64 顏濱日記 1944 年 11 月 11 日付.
- 65 前田哲男, 前掲書.
- 66 田中利幸, 前掲書, 218 頁.
- 67 Kranzler David, 前掲書, 358 頁.
- 68 『交通週刊』第 1 卷第 4 期, 1945 年.
- 69 同前.
- 70 王永 『每週訊報』1945 年, 第 3 期.
- 71 潘洵 「論重慶大轟炸对重慶市民社会心理的影響」『重慶師範大学学報(哲学社会化学版)』2005 年第 4 号.
- 72 朱自清 「論轟炸」『朱自清全集 第 3 卷』江蘇教育出版社, 1996 年, 418 頁.
- 73 エドガー・スノー 『斯諾文集: (一)-(四)』第 1 卷, 新華出版社, 1984 年.